

三省堂『現代の国語』

教科書の改訂に伴う 指導用参考資料

◆ 繼続教材（説明的文章）の変更点

三省堂令和3年度版『現代の国語』から継続して令和7年度版『現代の国語』に掲載している説明的文章教材のうち、次の教材につきましては、本文の改訂を行いました。

- 第2学年「人間は他の星に住むことができるのか」 2
- 第2学年「一〇〇年後の水を守る」 3
- 第3学年「フロン規制の物語——〈杞憂〉と〈転ばぬ先の杖〉のはざまで」 4

本文の具体的な改訂内容につきましては、次ページからの表に示しています。
ご参照ください。

なお、表では次の印を用いて改訂内容を示しています。

- | | |
|---|------------------------|
| ■ | ↓ 令和3度版の教科書から削除した部分 |
| □ | ↓ 令和3年度版の教科書から変更した部分 |
| △ | ↓ 令和7年度版の教科書に新たに追加した部分 |

令和7年3月

三省堂

令和3年度版『現代の国語』

【P47 L7～9】

探査機が火星を撮影した写真を詳しく見ると、川の流れによつて深くえぐれたと思われる部分や、その堆積物がありそうなことがわきました。

【P47 L13～P48 L5】

一九九七年には、探査機マーズ・パスファインダーが火星着陸に成功し、形の細長い岩が同じ方向を向いているのを発見しました。これは、以前に洪水が起こったと考えられる決定的な証拠となり、火星にもかつて海や湖があつたことが証明されました。そして、二〇〇九年、探査機フェニックスが、かつて火星に存在した水の一部が、地下に永久凍土として埋まつていることを確認しました。火星は太陽から遠いため、表面に届く太陽のエネルギーの量は、地球に届く量の半分程度しかありません。そのため、火星は地球と比べて非常に寒く、平均表面温度はマイナス四三度、最低温度はマイナス一四〇度にもなります。それで、火星の水は氷として地下に眠っているわけです。

令和7年度版『現代の国語』

【P51 L12～P52 L7】

探査機が火星を撮影した写真を詳しく見ると、川の流れによつて深くえぐれたと思われる部分や、その堆積物がありそうなこともわきました。

一九九七年には、探査機マーズ・パスファインダーが火星に着陸し、洪水の痕跡を確かめました。二〇〇四年には探査機オポチュニティが着陸し、海の干上がつた痕跡や堆積物を発見しました。これらは、火星にもかつて海や湖があつた決定的な証拠となりました。そして、二〇〇九年、探査機フェニックスは、かつて火星に存在した水の一部が、地下に永久凍土として埋まつていることを確認しました。火星周回探査機の観測では、地下の永久凍土層に含まれる氷は、火星表面を全て覆うほどの量であると推定されています。火星は太陽から遠いため、表面に届く太陽のエネルギーの量は、地球に届く量の半分程度しかありません。そのため、現在の火星は地球と比べて非常に寒く、平均表面温度はマイナス四三度、最低温度はマイナス一四〇度にもなります。それで、火星の水は氷として大量に地下に眠っているわけです。

令和3年度版『現代の国語』

【P 89 ページ】

このように、地球に存在する水の中で、実際に使える水は限られている。そのうえ、地球にある水は姿を変えて循環しており、その総量は増えることがないどころか、汚染が進んで使える水の量は減り続けている。

【P 91 ページ】

一方で、日本の主な輸入相手国である、中国、アメリカは、**水の消費量**が多く、水不足の状況にある。

【P 92 ページ】

日本の**食品廃棄物**の発生量は、年間二八四二万トン。仮に、捨てられたものが御飯だとすると、それを生産するのに使われる水の量は、年間一〇五一億五四〇〇万トンになる。一人当たり一日二・三トンの水を捨てているのと同じことだ。

【P 92 ページ】

また、水を張った田んぼにも地下水涵養の機能があり、平均して、一日一ヘクタール当たり二〇〇トンの水を土壤に浸透させている。

令和7年度版『現代の国語』

【P 149 ページ】

地球上にはもともと水の多い地域と少ない地域がある。水の少ない地域では水不足が起こりやすいし、水が多い地域でも汚染されてしまえば使える水は少なくなる。

【P 151 ページ】

一方で、日本の主な輸入相手国である、中国、アメリカは、**食料の生産量**も多いが水の**消費量**も多い。

【P 152 ページ】

日本の**食品ロス**の発生量は、年間五二二万トン。仮に、捨てられたものが御飯だとすると、それを生産するのに使われる水の量は、年間一九三億一四〇〇万トンになる。一人当たり一日四四〇キログラムの水を捨てているのと同じことだ。

【P 152 ページ】

また、水を張った田んぼにも地下水涵養の機能があり、その量は地盤の環境によつても異なるが、多いところでは一日一ヘクタール当たり二〇〇トンの水を土壤に浸透させている。

●第3学年「フロン規制の物語——〈杞憂〉と〈転ばぬ先の杖〉のはざまで」

令和3年度版『現代の国語』

【P
94】
「2~3」

一〇一二年秋、世界気象機関（WMO）は、南極上空のオゾン層が回復しつつあると発表しました。

令和7年度版『現代の国語』

【P
106】
「2~3」

一〇〇〇年以降のオゾンホールの最大面積は、これまでのところ、毎年変動しつつもおおむね縮小傾向にあります。